幌小っ子だより

幌別小学校教育目標

○ すすんで学びよく考える子

○ 互いに助けあい思いやる子

○ 丈夫な体でたくましく生きぬく子

（昭和62年3月改訂）

登別市立幌別小学校　　学校だより　第　7　号　　令和6年　9月20日

手をかけすぎず、親切を我慢して、成長を待つ
～主体性と当事者意識をもつ子どもを目指して～

校長 松 田 周 一

先日、工藤勇一先生という方の講演をききました。この方は、教育再生実行会議委員、経済産業省「EdTech」委員等を務められていた方です。東京の麹町中学校の校長として、宿題廃止、定期テスト廃止等、従来「当たり前」とされてきたことを覆した先生としても有名です。先生はこの講演の中で、今の学校教育においては、子どもたちに主体性と当事者意識をもたせることが、変化の激しい社会を生き抜くための最上位目標であると力説されておりました。この 2 時間弱の講演の中で気になったフレーズをほんの少し下に紹介します。

> 大人が先回りして「与え続ける教育」をしてきたから、（児童・生徒は）主体性を失い当事者意識（自分事として捉える意識）が無くなった。手をかければかけるほど生徒（児童）は自律できなくなり、自分がうまくいかないことを誰かのせいにするようになる。

さて、主体性と、当事者意識をもたせることの重要性については、異論はないところだと思います。過保護（手のかけすぎ）は良くないということも昔から言われていることです。それでは、この視点で幌別小学校の教育を考えてみます。

今の学習（幌別小学校も含めて）は与え続ける教育をしている側面がやはり強いのです。「自分で歩ける子どもをずっとおんぶして目的地に連れていく。」という教育を行っています。ただ、正直、限られた時間の中で定められた目標に達するためには、致し方ないところもあるのです。子どもの歩ける距離（年齢）によりますが、歩かせるより、おんぶしていった方が無駄なく、確実に目的地につきますから。これは、学びだけでなく生活全般にも言えることです。我々は、完全な安全状態を目指し、子どもを育てようとします。体もそして心も、怪我をしないよう、未然防止することを重要視します。先回りしすぎると「危機回避能力」「感情の制御」等を弱めることにもつながることは分かっていても、それが一般的な願いであり、学校にとっても第一義と考えてもよいでしょう。

これらの対応は、前述の講演内容に照らし合わせると、子どもたちの当事者意識を欠落させ「自分がうまくいかないことを誰かのせいにする」子どもを育てていることに繋がる可能性があるということになります。

そこで、保護者の皆様にご理解いただきたいことがあります。子どもたちに、これらの力を身に付けさせるために、学習や心の教育に関しては（学校安全以外は）、少し不親切な教師のアプローチになることもあり得るということです。従来の、様々な問題や課題に対して、道を整備し指し示すアプローチではなく、子ども自身が、道を選び・考え・判断するという自己決定の場を増やしたいのです。子ども同士でトラブルがあった場合、教師がジャッジするのではなく、「どうしたいのか。」「今後どうするべきなのか。」「何を助けてもらいたいのか。」等を考えさせることを通して当事者意識をもたせたいのです。

これを増やすと、時間はかかります。また、保護者の皆様からは、冷たい指導、不親切な指導ととらえられる場面が多くなることも予想されます。ただ、大事なことは、子ども自らが未来を切り拓く力を身に付けることです。そのためには、不親切も必要だということを、支援をしない支援も重要だということをご理解ください。

「不親切だけど頼れる教員・頼れる学校」を目指したいと考えております。

～幌小ニュース～

★タブレットのご家庭での充電よろしくお願いいたします。★

授業中電源が切れ、授業で困っている子が散見されます。家での充電の方よろしくお願いします。充電器の貸し出しが必要な場合は連絡ください。また、その他使い方も含め心配なこと等がありましたら遠慮なく学校へご一報ください。